

2009年2月1日

【礼拝説教】

「すべてここに集まる者は」

牧師 武田 真治

マタイによる福音書 12章 43～50節
イザヤ書 56章 5～8節

1、汚れた霊が人から出て行く

12章43から45節に出てくるイエス様のお話は、もちろん一つの「たとえ話」とも読めますが、そのまま「教え」とも受け取ることが出来ます。

即ち『汚れた霊は、人から出て行くと、砂漠をうろつき、休む場所を探すが、見つからない。それで、「出て来たわが家に帰ろう」と言う。戻ってみると、空き家になっており、掃除をして、整えられていた。そこで、出かけて行き、自分より悪いほかの七つの霊と一緒に連れて来て、中に入り込んで、住み着く。そうすると、その人の後の状態は前よりも悪くなる。この悪い時代の者たちもそのようになる。』です。

最初に「汚れた霊」などという言葉が出ていて、もう何のことかといぶかしげになるのですが、おっしゃっておられることはそれ程難しいことではないと思います。

この12章はずっと病気の癒しや悪しき霊の追い出しについて語られてきました。従って、ここもイエス様によって病気が癒されたり、問題が解決されて「汚れた霊がその人から出て行った（＝追い出して頂いた）」状態にある人のことが考えられていると言えます。それはその本人にとって幸いなこと、嬉しいことに違いありません。イエス様から与えられた癒しの体験です。

ただ、ここでイエス様が問題にしておられるのは「その人のその後のこと」だと言えます。癒しを与えられて「めでたし、めでたし」ですべて終わるかという、そうではない場合もあるよということです。

2、出て来たわが家に帰ろう

イエス様によって追い出された汚れた霊は、新しい住み家を求めて「うろつく」のですが、いい場所が見つからない。それでもう一度、元いた場所に戻って来るのです。もしかしたら、居心地の良かった場所にまた住み付けるかと思って。

するとそこは「空き家になっており、掃除をして、整えられていた」状態になっていたのです。汚れた霊を押し出してもらい、心機一転、きれいに掃除をしてあったということでしょう。ですから、その汚れた霊は、これは前よりも良くなった、もっと住みやすくなったと思い、更に「自分より悪いほかの七つの霊と一緒に連れて来て、中に入り込んで、住み着く」ようになってしまいうだろうと。そうすると結局「その人の後の状態は前よりも悪くなる」ことになってしまうのではないだろうか？と言われているのがこのイエス様のお話の内容なのです。

どうでしょうか？なるほどと思います。現代でも、自分が苦しい時や病の只中にあるとき、「神様、仏さま、お願いします。私を癒してください」と必死になって願われる方は多くおられ

ます。教会員ではなく、一般の方から「先生、お話を聞いて下さい。お祈りに行っていいですか？」というお電話をいただき、お話をお伺いし、祈らせて頂くことがあります。そして、お祈りの効果であるかは分かりませんが、病が治られたり、手術が無事に終わったりされて、その時には感謝のお電話を頂くこともあるのですが、その後は全く無しのつぶてであるという経験を、実はたくさんしてきました。皆様も似たご経験をされておられるのではないのでしょうか？ 苦しい時や辛い時には必死になって願い求められるのに、いざその問題や課題が取り去られると何事もなかったかのように白々しい態度を取られるような方と出会われた経験が。

おそらくこの時、イエス様の周りにもそのような人たちが多くいたのではないかと考えられます。そのような方々を目にされて、イエス様はその人のその後の状況がもっとひどいことになりはしないか心配しておられると思うのです。

3、その心の真ん中に

では、どうしたらそのような悪しき霊たちにまた入り込まれ、支配されてしまうようなことを防ぐことが出来るのでしょうか？この点は人事ではないと思います。

イエス様がここで最も問題だとしておられる点は、その家が「空き家になっていた」という点です。悪霊を追い出してもらった後に、空き家のままであったので、再度、汚れた霊たちに入り込まれてしまったということなのです。もし、そこに他の存在がしっかりとその場所を占めていたならば、もはや悪霊たちの入り込む余地はなかったはずですし、更に悪霊が入ろうとして来てもはねのけることができる存在が自分の中にしっかりと座してくれればよかったです。そうしたらたちの悪い霊たちに入り込まれることは防げたのです。そうではないでしょうか？

その心の真ん中に居て頂く方こそイエス様その方ではないかと思えます。イエス様にとって悪しき霊を追い出して頂いたのなら、その空いた所にイエス様をお迎えすることはそれ程無茶なことではないはずです。そしてイエス様がしっかりと座して下さっているならば、もはや安心です。どのような悪霊も寄りつくことはないはずですから。

ですから、最も大事なことは私たちの心の只中にイエス様をお迎えすることです。まずこの点が出来ていなくてはどうなにかきれいにしようとも、掃除をしようとも、美しい心になってもダメなのです。

自分の心がきれいとか美しいだけでは、悪しき霊に対抗できないばかりでなく、かえって悪しき霊をもっとたくさん呼びこんでしまう条件を作り出してしまっているだけだと言われておられるのです。

4、掃除をし整えることの熱心

私たちが陥りやすい状態がここでイエス様が語られておられる心を「掃除をし、整える」ことです。心のきれいさ、純粹さ、塵ひとつないことを目指し、それを最も大事なことのよう思い込み、あたかも救いの条件であるかのように思ってしまう点です。そして、心を清く保つことばかりに熱心になってしまうのです。

加藤常昭牧師がこの箇所についての説教の中で「掃除がしてあり、純潔で美しい心、飾り立てている心こそ悪霊の住み家となるのだ、それが最も罪を犯しやすい心になるのだということ

であります。このことは、教会に集まる私どもが気をつけなければいけないことです。二十何年間か牧師の生活をしてまいりまして、私が言葉ではっきり口に出して言ったり、あるいは、言葉は隠しながらも闘ってこなければならなかった問題があります。そのひとつに、キリスト者特有の潔癖さであります。信仰のない人にも見られる、道徳家特有の潔癖さであります。自分はきれいな人間であり、正しい人間であり、自分の心にはしみ一つないのだと思い込んでいる。そこには信仰はないのです。それは神を迎い入れる道ではなくて、悪霊に入り込まれる道なのです。」と語られておられます。はっきりとした、厳しい言葉だと思います。しかし真実な言葉ではないでしょうか。

自分が正しい、自分の心は清いと考える人の問題は、そうでない他人や存在を許せなくなることです。結局は人を裁くのです。それは本当の自分、罪深い者に過ぎないことをも見失うことになるのです。そのような心は、神様をも迎え入れることがないのです。イエス様をも不徹底なこの世にまみれた存在だとして自ら押し出してしまうのです。神様に向かう道を閉ざし、最後には更に悪い悪霊たちのとりこになり果ててしまうのだと。この点を私たちクリスチャンこそが自ら注意しなければいけないことなのです。

5、この悪い時代の者たちも

以上のことを踏まえてイエス様は最後に「この悪い時代の者たちもそのようになろう」と預言しておられます。

現代の状況はまさにそうではないかと思います。健康に気を使い、ウォーキングやジョギングを毎日行い、食品の安全や産地にことのほかこだわるのです。その姿はまさに自分のことについては「掃除して、整える」姿です。

でも肝心なことは、その生活の真ん中にイエス様を向かい入れることではないでしょうか？

それは、いくら健康に気を使い、健康器具を買っても、一番考えなければいけないことは「自分の死」のことではないかということです。この死の問題を解決して下さる方はイエス様以外にはおられないのではないのでしょうか？この方のことを自分の人生に迎え入れることなしにいくら自分を掃除し、整えても空しいということです。この点を避けて自分の健康や将来のことに腐心することは、肝心なことから目をそむけていたい衝動ではないのでしょうか？その姿はむしろ悪しき霊に取り込まれてしまっている姿と言えるかもしれないと。

もちろん、健康に気を付けることや食べ物や生活に気を配ることを無駄だと言われておられるわけではありません。神様から与えられているこの体を大切にすることはキリスト者として当然のことです。

しかし、イエス様がここで語られておられるように、何よりも最初に私たちが自らの中心に据えるべき方がおられるのではないのでしょうか。わたしたちの心の只中にしっかりと、どっしりとイエス様はいてくださるのでしょうか。少々の悪霊の誘惑やささやきなどはびくともしない力強さで。改めてこのことを考えさせられるイエス様の言葉です。

(2月1日 礼拝説教より抜粋)